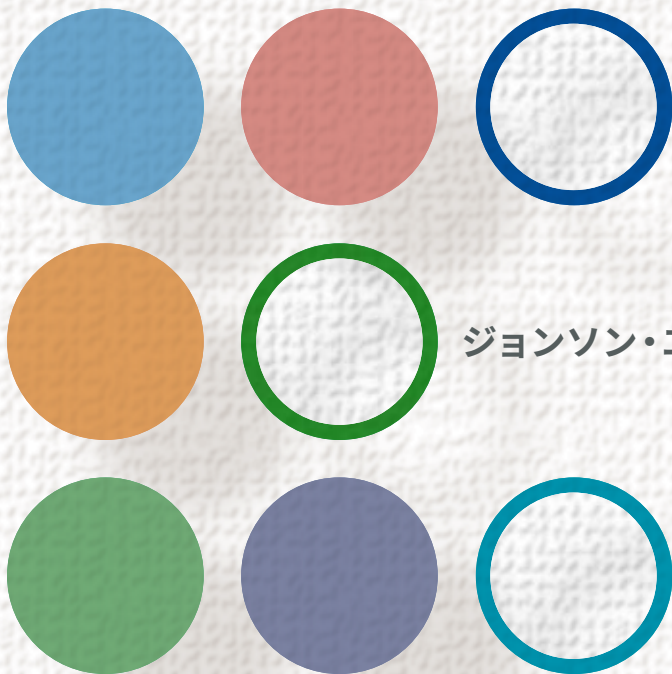




ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献レポート
2005年版

ごあいさつ

1886年の創業以来、ジョンソン・エンド・ジョンソンは幅広い分野で世界の人々の生命と健康に携わってまいりました。現在ではそのネットワークは世界57カ国、約200のグループ企業に広がっています。日本では1961年に事業を開始し、5つのグループ企業を通して製品・サービスをお届けしています。

ジョンソン・エンド・ジョンソンの企業理念である「我が信条(Our Credo)」には、我々が果たすべき責務が示されています。その中でも、地域社会への貢献は、ジョンソン・エンド・ジョンソンにとって特別に大切な責任です。私達が生活し、働く地域社会や、全世界の共同社会に対する責任を果たす目的で結成された、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、国内のグループ企業から選ばれた社員ボランティアが中心となり、有益な社会事業や福祉に貢献するための活動に携わっています。

私達の活動のテーマは「健康」です。ここでの「健康」とは医学的な病気の有無のみをさすものではありません。社会のありかたに人々が大きな影響を受ける今日、社会そのものの「健康」をも問われる時代になりました。NPOなどの非営利団体とのパートナーシップを通して、社会のニーズに適切に応え、人々、そして社会の「健康」に貢献していきたいと考えています。

昨年の初刊に引き続き、今年もまた「ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献レポート」をお届けできることになりました。このレポートを通して、着実にその歩を進めている私たちの取り組みについてご理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、日頃からの皆さまの温かいご理解、ご協力に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会
委員長 大瀧 守彦

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 ビジョンケア カンパニー代表取締役



CONTENTS

子どもの安全を守るために。—————	P3
女性の健康をたもつために。—————	P4
心の元気を取りもどすために。—————	P5
老いてますます輝くために。—————	P6
看護師のスキルアップを図るために。—————	P7
緊急災害支援 —————	P7
社員の提案による寄付活動 —————	P8
海外での社会貢献活動 —————	P9

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社、ヤンセン ファーマ株式会社、株式会社デピュー・ジャパン、オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社の4つのグループ企業が合同で運営しています。

Johnson & Johnson K.K.

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社

コンシューマー カンパニー

救急絆創膏などのウoundケア用品、ベビー用品、ティーン向けスキンケア用品、大人向けスキンケア用品、歯ブラシなどのデンタルケア用品など、日々の暮らしに欠かせない衛生用品や化粧品を幅広く提供しています。

メディカル カンパニー

外科、内科をはじめ幅広い診療領域で最新の医療機器・関連製品を販売しています。最先端医療のための技術導入や、患者さんの負担を軽減するための製品を通して、クオリティ・オブ・ライフの向上に取り組んでいます。

ビジョンケア カンパニー

1991年日本初の使い捨てコンタクトレンズを発売して以来、コンタクトレンズ市場を大きくリードしてきました。現在、タイプの異なる7種類の製品をラインアップし、目の健康とビジョン(視力・視界)の質の向上に貢献しています。



ヤンセン ファーマ株式会社

中枢神経系領域、鎮痛・麻酔領域、真菌症領域、がん領域の4つの重点領域で最先端の医療用医薬品を日本に導入、販売しています。また、最新の医薬品情報を医療の現場に提供し、医療と医薬の発展に貢献しています。



株式会社デピュー・ジャパン

整形外科の分野において、人工関節、吸収性骨接合材などの医療用具を販売しています。高齢化社会に対応し、人々の基本的な日常生活動作を阻害する疾患を改善する製品の提供に努めています。



オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社

輸血、感染症、生化学、免疫血清など、臨床検査の各分野において、多彩な臨床検査診断薬・機器システムおよび情報の提供を行っています。人にやさしい医療、より質の高い医療をめざして技術開発に取り組んでいます。

子どもの安全を守るために。

14歳以下の子どもの死因第一位は転倒や落下など「不慮の事故」によるものです。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、事故予防のための講演やワークショップなどの開催を支援することで、子どもの安全に社会全体が積極的に取り組んでいくように働きかけています。

子どもの事故防止セミナー

転落、誤飲、やけど、水の事故など、子どものまわりには危険がいっぱい。不慮の事故で亡くなる子どもが後を絶ちません。これらの事故は大人が注意すれば防げたものも少なくありません。まずは事故を予防する。そして万一事故が起きてしまったときには周りにいる人が適切な応急手当をする。社会全体がその意識と知識を持つことが、子どもの安全に大きな役割を果たします。

●子どもを不慮の事故から守る

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、日常生活で起こりがちな子どもの事故の様子を展示した「セーフキッズトレイン」(国立成育医療センター)や子どもにとって危険な台所まわりの箇所を提示する「セーフキッズキッチン」(宮城県立こども病院)を設置するなど、事故を起こさないための子どもの事故防止プログラムに取り組んできました。

●予防と対応の両面から安全を確保するために

一方、子どもの事故による犠牲を防ぐためには、事故が起きてしまったあとの迅速な対応も重要です。一口に応急手当といっても、相手が大人と幼児では手当の方法が異なります。子どもの安全を守るためには、事故を起こさない注意とともに、“万一子どもが事故にあったときどう対応するか”を知っておくことが大切

であり、そのための普及活動が必要とされています。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、財団法人東京救急協会*との協働で子どもの事故防止セミナーを開催しています。セミナーでは、予防と手当の両面から「事故予防の知識」と「事故後の手当の方法」を同時に学ぶ内容を盛り込んでいます。

●楽しみながら安全を学ぶ子どもの事故防止セミナー

2004年には、保育士・保健師など子育てに関わる職業に就いている人やその職業をめざしている学生向けに「不慮の事故と応急手当セミナー」(6月・東京都立川市、11月・岐阜県各務原市)や、親子を対象にした「夏休みワークショップ」(7月・東京都立川市)、「子どもの事故防止セミナー」(9月・山形県東根市)、など計4回開催しました。

親子向けのセミナーでは、小さな子どもにも分かりやすく身近にある危険をスライドで紹介したり、クイズ形式の講演を行っています。また、トレーニング用の赤ちゃん人形などを使っていろいろな応急手当を学ぶ実技には、大人も子どもも真剣に取り組めます。来場者からは「大人は日常の中に潜む見落としがちな危険をあらためて知り、子どもは安全への意識を高めることを通して“命の大切さ”を学ぶことができた」との声もいただいています。



*財団法人東京救急協会
1995年設立。一般の人から救急関連事業に携わる人向けまでの応急手当講習を東京都委託により行っている。その他各種の救急関連事業等を実施。

女性の健康をたもつために。

検査や治療の遅れや知識不足のために問題が深刻化するのを防ぐために、ウェブサイトなどによって情報を提供し、女性にとって相談しにくい悩みの解決に取り組むことを通して女性が生き生きと健康に暮らすパートナーをめざしています。

女性のからだとこころに関する情報提供

思春期から妊娠・出産そしてやがて更年期・老年期へと、生涯のうちに何回も変化する女性のからだ。それに伴うこころへの影響。女性特有の病気や症状については気軽に相談しにくく、密かに悩んでいる女性が多くありません。

●蓄積されたノウハウにもとづく情報発信

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、社団法人日本家族計画協会*との協働により、ウェブサイトや携帯サイトによる女性のための情報提供を行っています。日本家族計画協会は、主に健康教育の指導者を通して活動を行ってきました。サイトの運営にあたっては、これまで蓄積してきた母子保健から中高年女性保健に至る豊富なノウハウを反映させ、一般の女性たちに直接情報を発信しています。幅広い年齢層からダイレクトに返ってくるさまざまな反応を吸収しながら、ジョンソン・エンド・ジョンソン、そして婦人科の専門家も交えて三者で話し合いを重ね、より親しみやすく役立つコンテンツづくりに取り組んでいます。

●ウーマンズヘルスウェブ <http://jfpa.info/wh>

一生の中でも生活やからだの変化が大きい主に20代～50代の女性に向けて、正しい知識・適切な情報を提供するためのインターネットの情報サイトです。ウェブサイトのコンテンツでは女性のからだに関する幅広いトピックスを取り上げ、随時更新しています。

女性特有の病気やからだに関する「かしこい患者学」「知っておきたい女性のからだ」「日常の予防」など、女性ならだれでも関心のある内容が盛りだくさんです。また、医師が質問に対して回答する「ドクター相談室」や自分のからだをチェックできる「健康チェック」などを用意しています。2005年度からは、食や運動の面から健康をサポートするコンテンツ「ヘルシーレシピ」「ヘルシーエクササイズ」がスタートしました。

●ガールズナビ <http://girlsnavi.jp>

若い女性、特に10代に向けて発信している携帯サイトです。読者の質問に婦人科医師が答えるコーナーや、避妊・妊娠などの情報提供を通して、女性たちの性や健康に対する意識を高めることを目的としています。一日のアクセス件数はおよそ7000件。多くの若い女性が、性やからだについて悩んでいることがうかがえます。

Girls+Navi



*社団法人日本家族計画協会
1954年設立。思春期保健、健康教育、性教育、母子保健、中高年女性保健などに関する教育・広報事業、また不妊相談や思春期保健などのクリニック、カウンセリングを中心に幅広い健康教育や啓発活動を行っている。

心の元気を取りもどすために。

うつ病や統合失調症などの“こころの病”は、いまや多くの人が経験する疾患ですが、社会にはまだまだ誤解や偏見があります。こころの病を持つ人たちが安心して暮らせる社会環境づくりをめざし、社会復帰をサポートする活動や自殺を防止するためのプロジェクトを行っています。

全国こころの美術展

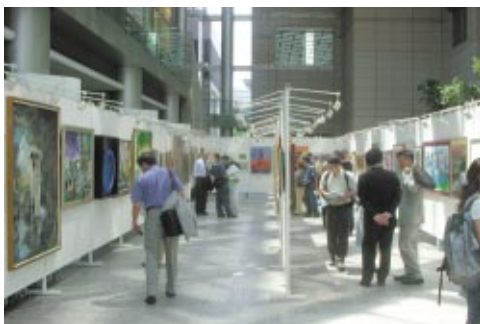
精神疾患は脳神経機能の病気のひとつで、他のからだの病気と同様、適切な治療により症状は改善されます。しかし、社会での誤解や偏見が“こころの病”を持つ人たちの社会生活を狭め、治療や回復の遅れにも影響を与えています。

●全国規模の公募展を開催

自分を何かのかたちで表現したい、自分の価値を認められたいという願いは誰もが持つ自然な気持ちです。それはこころの病を持つ人も同じです。喜びや楽しい・寂しい気持ちなど、言葉で伝えきれないことを何かで、あるがままに表現し、伝えたい。そのような中で2001年財団法人全国精神障害者家族会連合会*が事務局となって、こころの病を持つ人たちのアート作品の公募展「全国こころの美術展」**がスタートしました。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会が支援した2004年の第4回展には油絵、水彩画、貼り絵、版画など全国から525点の応募があり、100点の入賞・入選作品が東京と山形の会場で展示されました。

●目標を持ててうれしい

全国規模の絵画展に応募し評価されることは、自分への自信を生み、生活意欲や社会参加意欲を高めることに通じます。また作品を通して、一般の人に豊かな創造性や表現力を知ってもらうことは、精神疾患への理解を深め、偏見のない社会づくりにもつながります。「目標を持ててうれしい」と応募者の多くが感想を述べ、「感動した」「また来たい」と一般の来場者が記しています。本美術展への支援を通して、こころの病に苦しむ人たちの生きがい発見・社会復帰を応援しています。



*財団法人全国精神障害者家族会連合会（全家連）

全国の都道府県にある精神障害者家族会で構成する全国組織。

**全国こころの美術展

精神障害者を支援する全国の団体によって組織された全国こころの美術展実行委員会により開催。

参加団体：(社)日本精神科病院協会、(財)全国精神障害者家族会連合会、(社)日本全国精神障害者社会復帰施設協会、(NPO)全国精神障害者地域生活支援協議会、全国精神保健福祉相談員会、(NPO)全国精神障害者団体連合会、日本精神保健福祉士協会、(社)日本精神科看護技術協会、(社)日本作業療法士協会

自殺防止プロジェクト

日本の自殺者数は年々増加し、年間3万人を超えています。自殺未遂者は少なくともその10倍は存在すると推定され、未遂・既遂が1件生じると、強い絆のあった最低5人は深刻な心理的影響を受けると考えられています。いま、自殺防止は、社会全体で取り組まなければならない大きなテーマのひとつとなっています。

●「救いを求める叫び」を聞く

人はなんの前触れもなく自殺を遂行するわけではありません。たいていは何回か自殺未遂というシグナルを点滅させています。その赤信号は「死にたい」という意思表示よりも、「生きたい」と無意識のうちに願う魂からの悲痛な叫びといわれます。家族や地域がその苦しい気持ちを受けとめ、情報を共有し、社会全体として連携サポートをすることが、自殺を防ぐうえで大きな役割を果たすのです。

●自殺防止の手引書の発行を支援

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会は、30年以上にわたって自殺防止に取り組んでいる社会福祉法人いのちの電話*と日本自殺予防学会**による「地域と家庭における自殺予防のための手引き」の発行を支援しました。この手引書には、人はなぜ自殺するのか、自殺を考えている人とどう向き合うか、自殺の危機にある人をどう援助するかなど、自殺心理の理解から具体的な援助方法までがわかりやすくまとめられており、周りの人の理解と思いやりが自殺をくい止める大きな力になることを示しています。



*いのちの電話

自殺予防を目的として1971年に発足したボランティアによる市民活動。日本いのちの電話連盟傘下に、全国51か所の電話センターがあり、電話相談を通して、地域に根ざした自殺予防活動を展開。年間約70万件の相談があり、主婦を中心とした約7500人のボランティア相談員が対応している。なお今回は社会福祉法人いのちの電話（東京）を支援。

**日本自殺予防学会

精神科医、心理学者が中心となって1970年設立。自殺およびあらゆる自己破壊行為を防止するために、研究、実践、教育、啓発活動を行っている。

急速な高齢化のなかで、運動能力の衰えとともに家に閉じこもりがちになったり、コミュニケーション能力の低下のために自信を喪失し、精神的に孤立感を深めている高齢者も増えています。ジョンソン・エンド・ジョンソン 社会貢献委員会では、高齢者が充実感を持って生き生きと過ごせる社会環境づくりをめざしています。

高齢者プログラム

高齢者が精神性を高め自信を取りもどし、身体機能を向上させて社会との接点を増やすために、「高齢者のこころとからだの自立」をテーマにしたプログラムを、慶成会老年学研究所*との協働によって行っています。

●高齢者のこころとからだの自立を考える

高齢者のケアについての可能性を探り、今後のプログラムの方向性を討議するために「高齢者のこころとからだのケア研究会」を発足させました。ここでは、医師、心理学者、高齢者施設長、地域のNPO代表など、さまざまな視点をもつ人々が集まり、高齢者がかかえる課題や高齢者ケアに何が求められているかについての話し合いが行われています。

また、2004年には90歳以上の超高齢者の心理への理解を深めることを目的とした「超高齢者が『古い』を語り合い、伝えあう会」を実施しました。

●さまざまな世代が集う場の創出

高齢者のこころの活性化を促すためのひとつの試みとして、古来より人々の集まる場所である寺を舞台に、2004年7月、高齢者と若い世代が集い語り合う「寺子屋回想法」を、また、12月には、小学生も参加して高齢者と同じ体験を楽しむ「寺子屋童子回想法」を開

催しました。

過去の生活体験やできごとを語ることでこころの安定を取りもどすことを目的とした心理療法「回想法」を取り入れたこのプロジェクトでは、若い世代が高齢者の話を聞き、また、子どもと一緒に体験を分かち合うことを通して、互いの経験や地域の記憶を共有し、異なる世代同士でこころを支え合うことをめざしています。

●語り合うことで自信を取りもどす

東京・世田谷の寺で開かれた「寺子屋回想法」では、「語る」こと「聞く」ことを通して、高齢者も若い世代もお互いの存在を認め合うこととなりました。高齢者は自らの記憶を受け継いでくれる若い人たちの存在を知ること、自分の人生を価値あるものとして再認識するなど、さまざまな刺激によりこころの活性化が促されます。一方、若い世代にとっては、人生の先輩である高齢者から大切なものを学ぶ機会となりました。高齢者プログラムではこの「寺子屋回想法」をひとつのモデルケースとし、将来は、さまざまなかたちで高齢者と若い世代の交流の場が全国規模で広がっていくことを視野に入れ、そのための指導者育成にも力を入れていきたいと考えています。



*慶成会老年学研究所

高齢社会に関する医学的・心理学的臨床、研究および教育・研修を3本の柱として活動。高齢者メンタルヘルスケアの研究に取り組み、高齢者ケアの実践的な場に生かしていくためのさまざまな活動を行っている。

所長：黒川由紀子(上智大学教授)

撮影：菊池和男

医療技術が日々進歩する中、看護師には知識の更新と高い技術が求められます。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、認定看護師のためのeラーニングプログラムの構築と運営を支援しています。

認定看護師の継続教育

日本の看護師は70万人を超える一方で、高度な看護ケアの必要性が強くなっています。社団法人日本看護協会*は特定の看護分野において熟練した技術と知識を持ち、水準の高い看護や指導ができる看護師の育成を目指して「認定看護師制度」を10年前に発足させました。現在、認定看護分野は17分野ありますが、認定看護師数は全分野合わせて全国におよそ1200人、今後さらに認定分野も人数も増えていく予定です。

●多忙な認定看護師を助けるために

認定看護師の役割は、看護業務の実践・他の看護師の指導・専門的問題の相談業務など多岐にわたり、臨床



現場で働きながら専門分野に関する最新の医療情報やガイドラインを学んだり、学会やセミナーに出席することは、生易しいことではありません。eラーニングプログラムは、多忙な環境にある認定看護師が、好きなときに自分のペースに合わせて学習することによって継続的な自己研鑽を容易にし、より意欲的な取り組みへと向かうことをねらいとしています。

●2005年より配信スタート

学習コンテンツは、日本看護協会看護研修学校の教師陣が中心となって作成し、モデルコンテンツ「感染管理」分野のテスト配信・評価が2005年4月からスタート。2006年度には6分野での本格配信を目標に進めています。認定看護師の継続教育のためのフォローアッププログラムは初の試みとなるため、現認定看護師はもちろん、認定看護師を目指して勉強している人にとっても心強い学習ツールとして歓迎され、役立っていくことと思われます。

*社団法人日本看護協会

1946年、保健師、助産師、看護師、准看護師の有資格者による職能団体として設立され、47都道府県の看護協会が連携活動している全国組織。会員56万人。看護職の資質向上と、人々の健康・保健医療福祉の向上を目指して活動や提言を行っている。

緊急災害支援

新潟県中越地震

2004年10月23日に発生した新潟県中越地震では、長引く余震やライフラインの復旧の遅れから、被災直後は多くの人々が避難所生活を余儀なくされました。病院では医療機器が稼働できず、適切な処置を行うことが難しいという問題もありました。

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、医療機関に対して、歯ブラシなどのオーラルケア製品、縫合糸・スキンステイプラーなどの医療材料を提供しました。また、水やガスなしで滅菌が可能な滅菌器「ステラッド」を2台無償貸与し、運用のために社員を派遣しました。



ステラッド設置作業

スマトラ島沖地震・津波

日本のジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、ユニセフと日本赤十字社を通じて2,000万円の義援金と、NGOセーブ・ザ・チルドレンを通じて1,600万円相当の製品を寄付しました。日本を含めたアジア・パシフィック地域のグループ各社が行った支援は、現金と製品合わせて約180万ドルとなりました。(2月14日現在) アメリカ本社からは、復興支援プログラムのために200万ドルを拠出し、赤十字社へ66万ドルの寄付を行いました。また約8,140万ドル相当の製品を提供しました。(1月12日現在) 今後も長期的な視野の中で、被災地のニーズに合った支援を行っていきたいと考えています。



製品の出荷

社員の提案による寄付活動

企業としての社会貢献は、社員一人一人の気持ちの反映でもあると考えます。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、社員から推薦された非営利団体への寄付を行っています。社員が自らボランティアとして活動をしている団体、日ごろから関心を持っている団体など、社員の視線を通した活動を支援しています。

支援先団体：メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン

メイク・ア・ウィッシュは1980年アメリカで発足した難病の子どもたちの願いをかなえるボランティア団体です。日本では1992年にメイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンを設立し、全国8拠点で活動を展開しています。「遊園地に行きたい」「サンタクロースと遊びたい」など、小さな願いも闘病生活の中では容易に実現できるものではありません。しかしそれだけに、願いがかなうことは子どもたちの生きる力や病氣と闘う勇気につながります。これまでに743人（2005年4月5日現在）の子どもたちの願いをかなえるお手伝いをしてきました。また一方で、一般の人々向けの活動にも力を注ぎ、2004年は全国40会場以上で「いのちの大切さ」「病気の子ども」「ともに生きること」をテーマとする講演会を開催しました。学童・学生には「次世代の担い手」として、シニア世代には「生きがい」や「ともに生きる」という観点から、認知と理解を進めていきたいと考えています。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、講演会の運営費用を寄付しました。



ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）
コンシューマー カンパニー 西川 千佳子



メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンでボランティアをしています。きっかけは偶然見たテレビ番組でした。夢がかなった時の子どものなんとも言えない嬉しそうな表情がとても印象的で、すぐに事務所へ問い合わせました。これまでは毎月行われている定例会や資金集めのためのイベント（ジョギング大会など）サポートに参加しました。将来は、子どもたちの願いをかなえる活動のスタッフとして参加したいと思っています。スタッフの責任は重大で、子どもたちの病氣や状況によって対応も異なり、またことばで伝えることが難しい子どもたちの願いを理解することも重要な仕事です。今後活動に必要な知識を習得し、やっとかなえられる願いを、子どもたちの思い描いているとおりに実現し、その思い出が大きな力につながるようお手伝いをしていきたいと考えています。

支援先団体：特定非営利活動法人 フードバンク関西

フードバンク関西は、尼崎市に拠点を置いて主に大阪と神戸で活動しているボランティア団体です。ヨーロッパやアメリカで20年以上の実績を持つフードバンクのシステムを導入し、食品製造業者、卸売業者、小売業者などから寄付された余剰食品を、ホームレスのシェルターや炊き出し活動を行っている団体、DV（ドメスティック・バイオレンス）被害者のシェルター、児童養護施設などに無償で提供しています。フードバンク関西が提供する食品は、その半分以上が子どもと高齢者に届けられています。また2004年3月からは、2カ月に一度、尼崎市内の知的障害者作業所と協働し、食品提供者であるスーパーマーケットの店頭において作業所生産品の即売会を開催しています。食品の提供者と受け入れ団体、そして地域社会を結び、「食」を通したネットワーク作りにも取り組んでいます。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会では、食品運搬費用を寄付しました。



ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）
メディカル カンパニー 日中 賢持郎



フードバンク関西を知ってから「おなかいっぱいご飯を食べる」という一見あたりまえのことが難しい人々がいることに気づきました。中でも児童養護施設の子どもの姿には自分の子どもが重なり、何かできることはないかと考えました。施設によっては補助金等の削減から、おやつや夜食などの予算が不足していると聞きます。社会的にきびしい状況におかれところにも傷を負った子どもが、その上、育ち盛りのからだに十分な食べ物を得ることまでも難しいとなると問題です。人間というものは、たとえ困難な状況に陥っても、おなかさえ満たされていれば希望は見えてくるものだと思います。子どもたちの将来のためにも、この活動を支援していきたいと考えています。今は個人的にも寄付を行っていますが、将来は資金集めのバザーのお手伝いなどにも参加したいと思っています。

その他の寄付先（50音順） 愛知排泄ケア研究会、芦屋家族会、いのちの友の会ヤング部会、HIVと人権・情報センター、えいそんくらぶ、XPひまわりの会、鹿児島県難病・障害者連絡協議会、がんの子供を守る会、共同作業所銀杏企画、京阪さい帯血バンク、血液患者コミュニティもの木、国際連合世界食糧計画WFP協会、こどもプロジェクト、視覚障害者ボウリング・コンgres・ジャパン、児童虐待防止協会、新宿西共同作業所・ラバンス、青少年育成支援フォーラム、精神障害者共同作業所むつみの家、精神保健サービスユーザーリーダーシップアカデミーワークショップ、世田谷ボランティア協会を支える会チャイルドライン応援団、「なんやろ絵なんやろ」展こころに平和を realization 委員会、日本IDDMネットワーク、日本子宮内膜症協会、日本青少年育英会、日本二分脊椎・水頭症研究振興財団、日本ビルマ救援センター、日本盲人マラソン協会、乳房健康研究会、ファミリーエージェンシー、ファミリーハウス、呆け老人をかかえる家族の会千葉県支部、ワタリ西日本、ワンダーアートプロダクション

Community Responsibility 地域特有の問題の解決

アメリカ

●アートを活用したヘルスケア

ジョンソン・エンド・ジョンソンはSociety for the Arts in Healthcareと共にアートを利用してよりよいヘルスケアを実現できないかと模索してきました。病気の患者がアートを通して自己表現することによって生きることを肯定し、自分自身の存在価値を見出すことは、患者のみならず患者と関わる家族や医療従事者にとっても有益な手段だと考えたからです。

2004年に寄付を行った20の“アートと治療プログラム”の一つが、16歳で亡くなったジャスティン君の訴えにちなんで名づけられた「I'm a Kid Tooプログラム」です。このプログラムは、レキシントン芸術文化協議会とケンタッキー大学が共同で始めたもので、深刻な病状にある子どもたちに治療や自己表現の手段として写真を用いて関わることで、また、医療従事者には、見える形で表現されたものを通して子どもたちの個別のニーズを把握するよう教育を行うことが盛り込まれています。



台湾

●女性の充実した生活の実現

台湾のジョンソン・エンド・ジョンソングループは、2003年、「希望 (Hope) 基金」を設立しました。

これは貧困のために社会的に不利益を受けている女性たちの自立の一環として、認定ヘルパーの資格を得るための講座への参加を支援するものです。ヘルパーに認定された女性たちは、子どもや高齢者の世話、家事などでサポートを必要としている働く女性たちを助けます。ヘルパー養成講座に参加する女性たちの経済的な負担を軽減する目的で、授業料と生活費のための金利0%のローンも設けられ、参加者の数は増加し、女性たちはより高い収入が見込める仕事に就くことができました。希望 (Hope) 基金は“トレーニングを受けた女性が他の女性を援助できる地域社会を創造する”というゴールを掲げています。



Children's Health 子どもたちの健康

パキスタン

●栄養不良防止プログラム

パキスタンでは、子どもの死亡の半数以上が栄養不良によるものです。ジョンソン・エンド・ジョンソンは、Aga Khan Health Serviceと協働で子どもの栄養不良を予防するプログラムを行っています。このプログラムでは、母親と子どもがプライマリーヘルスケアサービスを受けやすい環境を作るとともに、地域社会に対して出産時の母親の死亡率を低下させるための情報やサービスを提供しています。地域を基盤とした協力体制と共同で行う病気管理によって、子どもの病的な状況を改善しています。



チェコ

●子どもを虐待から守るために

ジョンソン・エンド・ジョンソンは、地域社会全体の取り組みが子どもの虐待を防止し子どもの権利を守ることにつながるという理念のもと、過去10年間にわたりチェコにおいて子ども保護プログラムを展開し、児童保護教育研究所を支援しています。この研究所では、子どもの権利と虐待防止についての啓発のために、さまざまなアプローチが行われています。過去2年間で2,000人以上の子どもたちを対象にワークショップが開催され、暴力や性的な虐待など幅広いテーマがとり上げられました。また教師やソーシャルワーカー、警察官、その他子どもに関わる職業に就く人々を対象にトレーニングが実施されました。ロンドンの英国児童虐待防止協会 (NSPCC) と共に進めている総合的なトレーニングは、子どもの保護における国際標準となっています。

会 員 活 動

主に5つの視点に基づき、それぞれの国や地域社会での問題解決に取り組んでいます。

Access To Care 医療機会の提供

ブラジル

●親子への健康教育

INMED Partnerships for Childrenは、地域社会の健全な発展と、将来のある子どもたちへの健康教育を推進するために、1986年設立されました。INMEDの「健康な子ども、健康な未来 (Healthy Children, Healthy Future) プログラム」では、病気の予防や栄養に関する教育、子どもたちの腸内寄生虫の駆除と栄養不良の治療、HIV/AIDSに関する知識の普及を行っています。ジョンソン・エンド・ジョンソンの支援によって、このプログラムは現在ブラジル全土で45万人以上の親子を対象に行われています。

2004年、INMEDはスイスのジュネーブで行われた寄生虫管理学会に招致され、寄生虫による疾病をどのように減少させたかについて発表の機会を与えられました。



インド

●貧困家庭の子どもたちへの医療支援

“笑顔で世界を変えよう”をスローガンに1999年に設立されたSmile Trainは、口唇口蓋裂で苦しむ世界中の数百万人の子どもたちを支援する組織です。55カ国以上で運営されているこのプログラムでは、発展途上国における数千人の子どもたちへの無償手術や15,000人以上にのぼる医療従事者への無償トレーニングを行ってきました。

インドでは毎年35,000人以上の口唇口蓋裂の子どもが生まれています。簡単な手術で治療できるにも関わらず、多くの家庭は貧しく、適切な医療ケアを受けられない子どもがたくさんいます。ジョンソン・エンド・ジョンソンは、Smile Trainに対して外科手術に必要な縫合糸を提供しています。



Advancing Health Care Knowledge 医療従事者の育成・教育支援

アメリカ

●学校保健師の知識向上

ラトガース大学アルコール研究センターとの協働プログラムである「ジョンソン・エンド・ジョンソン学校保健師奨学金プログラム (School Nurse Fellowship Program)」は、17年間にわたり400人以上の学校保健師への教育を行ってきました。

このプログラムでは、アルコールとドラッグの乱用、自殺、うつ病、10代の妊娠、肥満など幅広い課題について学びます。また、このプログラムの効果を実践につなげるために、参加者はそれぞれの学校特有のニーズに応えるプログラムを作成する費用の補助を受けることもできます。例えば、オハイオ州の学校保健師は、若年喫煙の有害性を伝えようと高校生たちを対象にした喫煙防止教育のプログラムを作成、実施し、生徒たち自身が喫煙防止の活動に取り組むことになりました。



Global Public Health 世界的な保健問題への取り組み

アフリカ

●HIV/AIDS啓発活動

Humana People to Peopleが南アフリカで行っているHIV/AIDS感染防止プログラムは、感染のリスクが高い地域でHIV/AIDSに関する啓発活動を行っています。全ての人々に情報が届くように各地域の担当官を育成し、地域の人々がHIV/AIDSの重大さについて話し合う機会を創出しています。2002年にジョンソン・エンド・ジョンソンは、南アフリカ ソウェトのブランフィッシャーズビルにおけるHIV/AIDS感染防止プログラムを支援しました。約56,000人が住むこの地域には社会的な設備が整っていないため、人々はほとんど医師の治療やケアを受けることができません。プログラムは3年間にわたって展開され、HIV/AIDSに直面したときに必要な情報や対応方法を地域の人々に提供しています。このプログラムは米国商工会議所によって“スターズ・オブ・アフリカ金賞”を授与されました。

Our Credo

我が信条

我々の第一の責任は、我々の製品およびサービスを使用してくれる医師、看護師、患者、そして母親、父親をはじめとする、すべての顧客に対するものであると確信する。
顧客一人一人のニーズに応えるにあたり、我々の行なうすべての活動は質的に高い水準のもでなければならない。
適正な価格を維持するため、我々は常に製品原価を引き下げる努力をしなければならない。
顧客からの注文には、迅速、かつ正確に応えなければならない。
我々の取引先には、適正な利益をあげる機会を提供しなければならない。

我々の第二の責任は全社員——世界中で共に働く男性も女性も——に対するものである。
社員一人一人は個人として尊重され、その尊厳と価値が認められなければならない。
社員は安心して仕事に従事しなければならない。
待遇は公正かつ適切でなければならない。
働く環境は清潔で、整理整頓され、かつ安全でなければならない。
社員が家族に対する責任を十分果たすことができるよう、配慮しなければならない。
社員の提案、苦情が自由にできる環境でなければならない。
能力ある人々には、雇用、能力開発および昇進の機会が平等に与えられなければならない。
我々は有能な管理者を任命しなければならない。
そして、その行動は公正、かつ道義にかなったものでなければならない。

我々の第三の責任は、我々が生活し、働いている地域社会、
更には全世界の共同社会に対するものである。
我々は良き市民として、有益な社会事業および福祉に貢献し、適切な租税を負担しなければならない。
我々は社会の発展、健康の増進、教育の改善に寄与する活動に参画しなければならない。
我々が使用する施設を常に良好な状態に保ち、環境と資源の保護に努めなければならない。

我々の第四の、そして最後の責任は、会社の株主に対するものである。
事業は健全な利益を生まなければならない。
我々は新しい考えを試みなければならない。
研究開発は継続され、革新的な企画は開発され、失敗は償わなければならない。
新しい設備を購入し、新しい施設を整備し、新しい製品を市場に導入しなければならない。
逆境の時に備えて蓄積を行わなければならない。
これらすべての原則が実行されてはじめて、株主は正当な報酬を享受することができるものと確信する。

Johnson & Johnson

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会
Johnson & Johnson Contribution Committee

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会は、「ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社」、「ヤンセン ファーマ株式会社」、「オーソ・クリニカル・ダイアグノスティクス株式会社」、「株式会社デビュー・ジャパン」で構成されています。

〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 TEL: 03-4411-6720 FAX: 03-4411-6794
URL <http://www.jjcc.gr.jp>